

1971. 12. 27

東京天文台 宇宙電波部 内
宇電懇 事務局◇ 運営委員会 報告

10月27日、豊橋市民文化会館にて開催

出席委員： 田中、鯉目、河野、南(高達代理)、大谷、田原、赤羽、
森本、海部。(他にオブザーバー多数)

<議事>

- (I) 45m中計画： ① 1971年度、科研費(試験研究)で「設計の研究」及び「三波帯水素気吸収調査」として210万円が決り、調査費は約900万円を1972年度概算要求として東京天文台から申請して113万と、本予算概算要求を1973年度で提出した意向であることが報告された。 ② 設計は、センターハブの模型実験、マスターコリメータの検討の段階に入ったこと、水素気調査用受信帯を移動用に改造中であることが報告された。 ③ 宇宙電波望遠鏡小委員会を72年初めに開催されるよう申し入れ、同時に宣伝用パンフレット(1月まで)、および第3次資料(4-5月まで)を作製することを決めた。
- (II) 宇電懇シンポジウム： 次回は第3回なので、総合的な内容を目指してはどうか(事務局)。1972年3月、名古屋で開催。内容、プログラムは、名古屋で一次案を作り、視測シンポジウム前に配る。
- (III) 財政： ① 現状は、通信費(〜20,000/yr.)が恒常費で、運転資金が3〜5万あるとよい。 ② 今後の方針は、会費制、カンパ制、科研費が考えられる。 ③ 討論の結果、科研費(総研Aなど)に基礎はおくが、恒常費として300円/yr.の会費をとることに決定。
- (IV) 次期事務局・運営委員： ① 72年初頭、運営委員選挙を行なう。選挙管理は事務局。 ② 次期事務局は名古屋電研がひきうける。
- (V) その他： 総研BでSAMとの協力を決定。

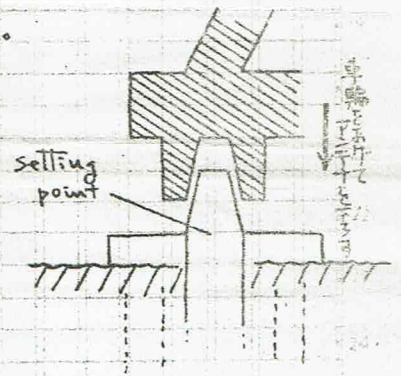
15 m 中・将来計画

- (1) 仕様変更 ; 概算要求の提出にあたり、面精度仕様を、
ER 50°~70° で 0.4 mm r.m.s. 全 ER 角で 0.6 mm r.m.s. 以内
と変更した (旧仕様は、0.5 mm r.m.s. 及び 1.0 mm r.m.s. 以内)。
これに伴い、指向精度 5/1,000 度以内、再現性 1/1,000 度以内、
マスターコリネータ角度検出 0.5/1,000 度 (=1.8'') 以内と変更した。
- (2) 45 m 中設計 ; 変形実験用 1/10 アクリル模型ができあがり (12月)。
1月から実験に入る。これによって、4~5月にはセニターハ
ブの設計が固まる。マスターコリネータは、Az-ER 方式で
1 m 中のスパーギヤを用い、最終ギヤ及びベアリングの偏りを
補正すれば、計算上は 0.37/1,000 度が可能である。なお、
ウォームギヤの可能性も含め検討を進める。1/100 ~ 1/200 の
全体模型の製作を検討中。
- (3) 干渉計 ; 三菱電機にて干渉計の才一回議論を行なった (田中、赤羽、河野、森本、海部が出席)。レール長 1 km、面精度 0.4 mm r.m.s. (10 m 中)、位置精度 0.4 mm、アンテナ 5 個とする。基本構想は、① homologous っぽくなく、rigid な構造とする。② 3 本足で、2 本のレールにのせる。③ テーパ状の珪酸ガラス (四) ピンの上にアンテナをおくして固定する。④ 光学系は通光のカセグレン型がよい (ホーン・レフでは、偏波に問題がある)。1 月に再度討論を行なって、設計を固める。

中電総ミニポジウム

1972年3月22, 23, 24日 於名古屋大学

太陽電波をも含む。詳しくは別紙回報
を御覧下さい。ミニボ事務局は、名大理学部
A 研です。



大気水蒸気の観測

11~12月、名大 A 研、空電研、東京天

文台の協力で、野辺山・富士山嶺で各1週間観測。現在三戸で
観測中。1月には木更、その他で観測予定です。